

生徒が悩みや不安を打ち明けられるような 教師のあり方

— 教師の観察力や洞察力に着目して —

学 籍 番 号 2 4 9 2 2 2

氏 名 若宮 史佳

主指導教員 瀧野 揚三

副指導教員 平井 美幸

1. 緒言

小中学校における不登校児童生徒数は年々増加し続けており、学校現場における今日の大きな課題の一つである。文部科学省（2022）の「生徒指導提要」では、生徒指導の重層的支援構造により、一次予防にあたる常態的・先行的（プロアクティブ）生徒指導の必要性が示されている。不登校においても、子どもたちにとっての安全・安心な居場所の提供や、観察力や洞察力を活かした関係づくりなど、未然防止にむけた取り組みが明記されている。こうした背景から、不登校の未然防止をめざし、子どもたちにとって学校が安全・安心な居場所になるよう、観察力や洞察力といった教員として必要な力を身につけたいと考えた。そして、本実践課題研究により、不登校の未然防止につながる安全・安心な居場所づくりや子どもたちへの働きかけの前段階である、教師の観察力や洞察力を活かした気づきの重要性について明らかにしたいと考えた。

そこで、本実践課題研究では、居場所感の形成をめざした実践を省察し、不登校の未然防止につながる教師のあり方を検討することを通して、教師の観察力や洞察力についての示唆を得ることを目的とした。

2. 居場所感の形成をめざした実践

本章では、実習校の生徒とのかかわりを通して、笠松ら（2025）が定義した「関わりの中で安心感が得られ、ありのままの自分でいられる人間関係」という居場所感の形成をめざした実践に取り組むことを目的とした。

実践では、様々な教科での授業観察や、休み時間や部活動の時間を活用した生徒観察を行い、様々な場面での生徒とのかかわりを通して、生徒理解を深めた。また、生徒の様子について、些細なことでも印象に残るような姿がみられたときは、その日のうちに関係する先生に報告することを通して、先生方と生徒のことについて情報を共有する機会を得た。

実践の結果、様々な場面で生徒観察を行ったことが生徒理解を深めることにつながり、それが生徒の変化や困り感への気づきをもたらしたことから、日頃からの多様な場面での生徒観察は生徒のSOSへの気づきにおいて重要であると考えた。また、その気づきを活用した生徒への継続的な働きかけによって、生徒がSOSを出しやすくなるような関係性が構築され、生徒からの援助要請の促進にもつながった。さらに、先生方と、生徒に関する見立ての共有や意見交換を行ったことによって、生徒理解の促進や理解の幅を広げることができた。

3. 生徒とのかかわりにおける教師の意識に関する質的研究

本章では、実習校の教員へのインタビュー調査から、生徒の安全・安心のため、教師は生徒とのかかわりにおいてどのようなことを意識しているのかを明らかにし、不登校の未然防止につながる教師のあり方を検討することを目的とした。対象者9名より、インタビューを用いて得た回答から、分析テーマを「中学校教諭による生徒の安全・安心のためのかかわり」、分析焦点者を「中学校教諭」として、分析ワークシートを用いて概念生成を行った。さらに、概念同士の個別比較をし、関係がありそうなまとまりを考えることで、複数の概念をまとめたカテゴリーを抽出した。

本調査の結果、4つのカテゴリーが抽出された。このことから、【チームとしての連携・協働】を基盤として、言葉でのコミュニケーションはもちろんのこと、【非言語コミュニケーション】を大切にしたかかわりによって、【あたたかい関係性の構築】がなされ、【生徒を導く働きかけ】が可能になると考えられた。

4. 成果及び課題

本実践課題研究における居場所感の形成をめざした実践及びインタビュー調査の分析によって、以下の成果が得られた。

- ・様々な場面での生徒観察によって生徒理解を深めることができ、それが生徒の変化や困り感への気づきにつながった。
- ・気づきを活用し、生徒への声かけ等の働きかけを継続的行ったことで、生徒がSOSを出しやすくなるような関係性を構築することができた。
- ・気になる生徒に関する状況や様子について、先生方と見立てを共有したことで、より深く生徒理解の幅を広げることができた。
- ・抽出された4つのカテゴリーのうちの【生徒を導く働きかけ】は、【あたたかい関係性の構築】がなされていてこそ機能するものであるという順序性を示すことができた。
- ・教師の観察力や洞察力は、あらゆる教育活動の基盤として重要な役割を担っていることが示された。

一方、本実践課題研究で明らかにした教師の意識や心がけについて、生徒の視点から捉え直すことで、双方の意思疎通を促進するとともに、教師の意識や心がけのさらなる発展につながる。また、継続的な不登校生徒数等のデータ収集などにより、生徒が抱えるSOSへの気づきを基盤とした働きかけと不登校の未然防止との直接的な関連を示すことが、今後の課題である。

5. 結論

居場所感の形成をめざした実践により、あらゆる教育活動における生徒観察の重要性を示すことができた。また、インタビュー調査によって抽出された4つのカテゴリーから、生徒が考える「居場所感をもたらす教師の特徴」と教師が考える「居場所感をもたらす教師の特徴」は、おおよそ一致しているという示唆を得ることができた。こうした実践を通して、生徒の居場所感の形成や安全・安心のためのかかわりにおいて、生徒の変化やSOSに気づくための教師の観察力や洞察力の重要性を示すことができた。